

# 「教職実践演習（仮称）」の 指導の在り方に関する研究

— 動向と課題及び指導事項（3）を中心に —

共同研究者    前崎   敏雄    光友    剛  
                    藤岡    弘        堤        直樹

はじめに

○ 本研究の概要（経大論集・38巻第1号を中心に）

- I 「教職実践演習（仮称）」をめぐる文部科学省等の動向
  - II 「教職実践演習（仮称）」の新設・実施をめぐる問題と課題
  - III 「教職実践演習（仮称）」に含めることが必要な事項についての内容研究
- 3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- A 児童・生徒理解の今日的課題
  - B 児童・生徒理解とすすめ方
  - C 学級経営の意味と重要性

おわりに

○ 本研究の今後のすすめ方

## はじめに

本研究は、新設科目である「教職実践演習（仮称）」について総合的な視点から研究し、実践への移行を容易にすることを目的とするもので、経大論集38巻第1号でその大綱について述べている。次にその概要について述べ、今回の論集との関連を図りたい。

前号では、中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成18年7月11日）の答申をもとに、次の5つの項目でまとめた。

I の「研究の目的と領域」のなかでは「教職実践演習（仮称）」の新設・

必修化の経緯と背景、全体像の研究、科目のなかに含めることが適当であるという4つの事項についての内容研究といった点から研究をすすめることを明らかにしている。さらに、本研究の最終の到達点は、科目をすすめるにあたっての指導マニュアルと評価基準の作成であることを述べている。

Ⅱの「研究計画」については、2ヵ年の継続研究とし、共同研究体制によってすすめていくことを述べ、1年次、2年次の計画の概要を紹介している。

Ⅲの「教職実践演習（仮称）」の「新設・必修化の経緯と背景」については諸答申を通して、新設・必修化の経緯と背景について明らかにしている。

Ⅳの「新設・必修化された「教職実践演習（仮称）」の全体像」については、平成18年の中央教育審議会答申に基づいて、その全貌を正確にとらえ、まとめている。

Ⅴの「教職実践演習（仮称）」に含めることが必要な事項についての内容研究については、1の使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、2の社会性や対人間関係能力に関する事項の内容について、平成18年の中央教育審議会の答申の別添1の「授業内容例」と「到達目標及び目標到達の確認指標例」を参照しながら内容研究をすすめ、まとめている。

以上、前号の概要について紹介してきたが、本号においては、これらの研究を受けて、「教職実践演習（仮称）」の文部科学省の動向や問題点、課題性を明らかにしていくよう考えている。また、「教職実践演習（仮称）」に含めることが必要な事項の3の内容について研究を深めていきたい。

## I 「教職実践演習（仮称）」をめぐる文部科学省等の動向

文部科学省は、「教職実践演習（仮称）」の取り扱いについて、平成20年5月9日、各大学に対して21年度入学生より新カリキュラムを適用することを検討していると連絡してきたが、平成20年6月10日に開催された教員養成部会の決定により、「平成22年度の入学生」より、新カリキュラムを適用する

よう考えている旨の訂正の連絡があった。

また、同部会において

- ・教職に関する科目として「教職実践演習（2単位）」を新設すること
- ・教職に関する科目より「総合演習」を廃止すること

の決定がなされたことも通知された。

さらに、このことを受けて、今後、免許法施行規則の改正については、平成21年4月1日からの施行を予定しており、新カリキュラムの適用については、先に述べたように「平成22年度入学生」よりと考えられている。

「教職実践演習（仮称）」についての文部科学省の今後のスケジュールについても次のように示されている。

- ・平成20年前半 省令改正

省令改正後、課程認定のスケジュール、申請書類、申請時期  
認定要件等について各大学に周知

- ・平成21年4月 改正後の免許法施行規則施行
- ・平成21年度中 課程認定大学より教職実践演習に関する書類の提出
- ・平成22年4月 22年度入学生より新カリキュラム適用

現在の段階での「教職実践演習（仮称）」についての文部科学省の取り組みについては、まだ検討しなければならない課題が残されているものと思われる。なお、この点について「教職実践演習の開設に関する今後の手続きについては、内容が確定後に連絡する」「本年度に課程認定申請を行う大学においては、本年度の申請書提出にあたり「教職実践演習」の開設は必要ないとともに「総合演習」についてはこれまでと同様に申請が必要となります。」といったことが付記されている。

以下、手元にある諸資料に基づいて教職実践演習をめぐる主な取組の経過について列挙的に整理してみる。

#### ○ 平成20年9月3日（文部科学省）

課程認定大学宛に、教職実践演習の導入等に係る教育職員免許法施行規則改正のパブリックコメントを9月3日から10月2日の期間設ける旨のメール

が送信された。

○ 平成20年9月19日（全私教協教員免許事務検討委員会）

「教員事務研究会」（平成20年9月6日（土）於 国士館大学）での、文部科学省の教員免許企画室 免許係長の田井裕子氏の「教育職員免許法施行規則の改正について－教職実践演習をはじめとして－」の講演内容と質疑応答を含め、教職実践演習についての現時点での情報として送信されたものである。

○ 平成20年12月3日（文部科学省）

「教職実践演習の課程認定申請等について」という件名で教職課程担当者宛にメールが送信され「教職実践演習」が11月12日の教育職員免許法施行規則の改正により新設されたので、申請要領に従って事務手続きを進めてほしい旨の連絡文書である。

○ 平成21年1月18日（全私教協教員事務検討委員会）

この資料は、「文部科学省発表資料に基づく教職実践演習に関する現時点での情報のまとめ」として出されたもので、10月28日、31日に開催された文部科学省による説明会の資料、全私教協研究交流会（11月8日）での配布資料及び12月3日、24日に文部科学省より送信されたメール添付の資料に基づいて作成された27ページにおよぶもので、この時点での情報を的確にまとめている。

○ 平成20年1月30日（文部科学省）

教職実践演習に関する制度全般及び申請方法等について大学側からの質問について回答されたものである。

○ 平成21年2月17日（文部科学省）

送信件名「教職実践演習の参考資料について」として「平成19年度教員養成改革モデル事業報告書」が送付されたもので、授業の立案等に当たっての活用が期待されたものである。

○ 平成21年3月9日（文部科学省）

教職実践演習の改定についてのもので、申請様式についての項目に「シラ

バスにおいて、履修カルテを作成しているかどうかを確認することとし、履修カルテ作成を義務付けることとした。」といった文書が付記されている。

○ 平成21年4月6日（文部科学省）

教職実践演習に関する制度全般に関する大学側の質問事項について4月1日現在で文部科学省よりの回答として出されたものである。

○ 平成21年5月21日（文部科学省）

平成21年5月1日現在の教職実践演習についての質問とそれに対する回答として追加されたものである。

○ 平成21年6月24日（文部科学省）

教職実践演習の申請時期・申請方法等についての連絡・確認についての依頼内容で ①申請日の確認 ②申請書の作成方法についての補足 ③申請の今後のスケジュール等が記載されている。

○ 平成21年7月3日（文部科学省）

送信件名「履修カルテの作成例」として ①履修カルテの作成例 ②教育職員免許法施行規則改正の2点についての連絡である。

本研究とかかわる①の履修カルテの活用方法（例）として次のように述べられている。

（１） 履修カルテの作成はカリキュラム委員会で行う。

（２） 履修カルテの記入は、

① 教職関連科目の履修状況についての記入（大学又は学生）

② 必要な資質能力に関する評価についての記入（担当教員及び学生）

（３） 履修カルテの管理（教員養成カリキュラム委員会等で行う。

（４） 教職指導への活用（大学）

（５） 教職実践演習への活用（教職実践演習担当教員）

また、様式例として、履修カルテ①②が示されている。

今後、これらの資料は、さまざまな問題や疑問が発生した場合には、再度見直す機会が出てくるものと考えている。

## Ⅱ 「教職実践演習（仮称）」の新設・実施をめぐる問題と課題

「教職実践演習（仮称）」の新設については、各大学や研究機関等において、さまざまな意見や提言が出されている。これらの意見や提言を検討し、分析してみることは、本研究を深めるために有意義であると考えている。

ここでは、3つの機関の研究報告を通して、新設・実施をめぐる問題性や課題性を明らかにする。

### 1 東海教師教育研究の論説を通して

本誌は、「東海地区私立大学教職課程研究連絡懇談会」が発行する機関誌で、その第22号・23号（合併号）に、笠井尚氏（中部大学）の論説「中教審答申と教員養成・免許制度改革の実施」が掲載されている。

笠井氏は、中央教育審議会答申（平成18年）「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申の概要について述べ、さらに「答申の提案する制度改革」についてふれている。そのなかで「教職実践演習（仮称）」の問題点について次のように述べている。

科目の設定に関連しては、いくつもの疑問が残されている。この科目にたどり着くまで課題の履修をこなしてきたとすれば、この科目で「最低限の資質が身につけていない」と判断されることは原理的になさそうである。「身につけていない」と判断された場合、課程放逐になるのか、再度チャレンジすることが可能になるのかは不明である。多数の指導者による多角的な視点からの評価は責任ない交ぜの体制をつくる危険性もあるし、有効な「評価」とするためには、やはり対象者の学習改善の道筋が明らかにならなければならない。

教職実践演習が行われるであろう4年生の後期には、すでに教員採用試験の結果が判明しており、試験の可否は、学生の取り組みにも教員側からの評価にも影響することが考えられる。東京都のように、教委が進める教員養成・採用の別の枠組みが強力に機能するとき、この新しい授業の存在意識は

不明確になってしまうかもしれない。

教員志願者のスクリーニングは、現在においても課程の履修や教員採用試験によって行われていると考えられるが、養成段階においてこれ以上に①－④の内容を厳格に確認することにはどの程度意味があるだろうか。教育実習においても、近年、教員になる、または教員採用試験を受験する意思が厳格に確かめられ、現場の教員による指導は（個人差はあるものの）厳しくなっていて、課程の履修はそれほど安易なものでもなくなってきている。

## 2 全国私立大学教職課程連絡協議会・会報 NO59 を通して

本誌は、全国私立大学教職課程連絡協議会の機関誌で「2007年教職課程運営に関する研究交流集会」の活動報告をもとめたもので「教職実践演習（仮称）」について、次のように4項目をあげて考え方をまとめている。

### （1）「教職実践演習」導入に対する賛否

全大学を対象に「教職実践演習」導入について意見をたずねた。意見を賛否の観点から整理したところ、図5、表10の通りとなった。「どちらともいえない・その他」に分類された大学が98大学（39.5%）と最も多かった。次に多かったには「反対」と回答した大学で86大学（34.7%）であった。「賛成」と回答した大学も26大学（10.5%）見られた。

図5 「教職実践演習」について

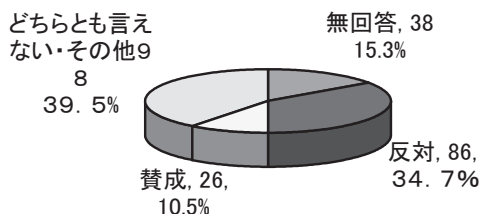


表10 「教職実践演習」について

回 答	回答数	割合
反 対	86	34.7%
賛 成	26	10.5%
どちらともいえない・その他	98	39.5%
無回答	38	15.3%
計	248	100.0%

## (2) 「教職実践演習」導入反対の理由

「教職実践演習」の導入に「反対」と分類された86大学の意見を整理したところ、表11のとおりとなった。「必要性・正当性がない」という回答が25大学と最も多く、次に多かったには、「実施時期に問題がある」で18大学であった。

表11 教職実践演習について、「反対」の大学の意見（複数回答）

回 答	回答数	回 答	回答数
必然性・正当性がない	25	既存の教職科目で対応可能	7
実施時期に問題がある	18	「教職実践演習」で教師の資質担保は無理	5
教員・大学に負担が過剰になる	10	すでに類似の授業を実施している	5
教育的効果はない・疑問	9	学生の動機付けに問題	4
事前事後指導で十分	9	開放制教員養成制度を揺るがす	3
学生の負担が過剰になる	8	「教育実習」の充実が先	1
実施上困難な問題がある	8	趣旨は理解できる	1
他の教職科目との関連が不明	8	対応せざるを得ない	1

## (3) 「教職実践演習」導入賛成の理由

「教職実践演習」の導入に「賛成」と分類された大学26大学の賛成大学の意見を整理したところ、表12のとおりとなった。「教育的効果がある」と回答した回答した大学が13大学と最も多かった。



表12 教職実践演習について、「賛成」の大学に意見（複数回答）

回 答	回答数	回 答	回答数
教育的効果がある	13	内容的には他の授業でも扱っている	1
趣旨は理解できる	3	対応せざるを得ない	1
実施時期に問題がある	3	すでに類似の授業を実施している	1
教員・大学に負担が過剰になる	2		

#### （４）「教職実践演習」導入についてのその他の意見

「教職実践演習」の導入に対する回答が「どちらともいえない・その他」に分類された98大学の意見を整理したところ、表13のとおりとなった。「趣旨は理解できる」と分類された大学が29大学、「実施時期に問題がある」と分類された大学が25大学、「実施上困難な問題がある」と分類された大学が17大学と比較的多かった。

表13 教職実践演習について、「どちらともいえない・その他」の大学の意見

回 答	回答数	回 答	回答数
趣旨は理解できる	29	教育的効果は疑問	4
実施時期に問題がある	25	大学側の教職課程充実への努力が必要	4
実施上困難な問題がある	17	他の教職科目との関連が不明	3
学生の動機付けに問題	9	「教職実践演習」で教師の資質担保は無理	2
教員・大学に負担が過剰になる	9	開放制教員養成制度を揺るがす	2
教育的効果がある	5	事前事後指導で十分	2
対応せざるを得ない	5	必然性・正当性がない	2
学生の負担が過剰になる	4	「教育実習」の充実が先	1
既存の教職科目で対応可能	4		

### 3 関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会教職カリキュラム部会のアンケートを通して

本調査は、2008年度関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会研究懇話会

シンポジウム「どうなる「教職実践演習」？－構想と課題」における討議の資料としてまとめられたもので、調査項目も次に示すように多岐にわたっている。

なお、アンケートの回答結果については、一部紹介にとどめている。

#### 〈アンケート〉私立大学における「教職実践演習」実施上の課題について（前文）

本アンケートは、2008年度研究懇話会シンポジウム「どうなる「教職実践演習」？－構想と課題」における討議の資料とするために、関私教協第三研究部会が幹事校会の依頼を受けて作成し、実施するものです。懇話会ではこのアンケートに基づき、報告をする予定です。

先日、2008年6月10日の中央教育審議会の教員養成部会の決定により、2010年度より教職に関する科目としての「総合演習」を廃止して「教職実践演習」新設するとの発表がありました。そこで、本年度、本研究協議会では、7月27日の研究懇談会でのテーマを取り上げ、文科省からの具体的指示に先だって、私立大学における「教職実践演習」実施上の課題をまとめて文科省に伝えることによって、この授業のよりよい導入と実施を実現したいと考えています。

研究懇談会まで1ヵ月という短い期間でまとめる必要がありますので、全会員校に調査することは困難と判断し、アンケート実施対象を関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会第三研究部会メンバー及び2007年度2008年度幹事校幹事に限定して、インターネットによるアンケートとすることに致しました。

なお、このアンケート結果は事前に文科省からのシンポジストに事前送付し、シンポジウムにおける文科省の発言につなげていただく予定です。個別の大学名、回答者名は公表いたしませんので、率直なご意見を記述いただければと思います。

先生方におかれましては大変にお忙しい毎日をお過ごしのことと存じますが、本アンケートへのご回答は、きたる「教職実践演習」の予測される問題点を浮き彫りにし、私たちの今後の教員養成の取り組みをより意義あるものにしていくことにつながるでしょう。また関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会が、我々自身の教員養成に積極的提言をしていく団体として発展していく機会にもなると思います。なおご回答はメールを受け取った方個人の見解で結構です。また回答字数等は適宜、増減していただいて結構です。

よりよい教員養成への一助となるよう、どうぞ皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

〈添付資料〉中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成18年7月11日）抜粋

## 「教職実践演習アンケート」質問事項一覧

**I 回答者、大学について**

- I 1 回答者・属性
- I 2 習得可能免許の種類

**II 現在の取り組み状況について**

- II 1 検討の状況
  - II 1 (1) 学内での検討をすでにしましたか？ ①した ②していない
    - II 1 (1) (a) 学内で検討を「①した」場合
      - ①教職課程担当者のみ ②全学の委員会で検討 ③その他
    - II 1 (1) (b) 検討の内容を具体的に書いてください
  - II 1 (2) 文部科学省・教育委員会などに事前相談・問い合わせをしましたか？
    - ①した ②していない
  - II ①(2) (a) 文部科学省などへ問い合わせを「①した」場合  
文部科学省・教育委員会に問い合わせた内容と得られた情報
- II 2 現在開設されている授業と新設の教職実践演習との内容や方法の比較
  - II 2 (1) 文部科学省は、教職実践演習の内容について、以下の〈1〉から〈4〉の事項を含めることが適当であるとしています。

- 〈1〉 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
    - 〈2〉 社会性や対人間関係能力に関する事項
    - 〈3〉 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
    - 〈4〉 教科・保育内容との指導力に関する事項
  - II 2 (2) (a) これらの内容は、現在の授業の中ではどのように扱われていますか？すでに扱われているとしたら科目名をお書き下

さい。

Ⅱ 2 (1) (b) 教職実践演習の内容に関して何かご意見がございましたらお書き下さい。

Ⅱ 2 (2) 中教審答申は、授業方法に関して以下の〈ア〉～〈オ〉のような方法を取り入れることが適当であるとしています。これらの方法は、現在どのように取り入れられていますか？

〈ア〉 役割演技（ロールプレイング） 〈イ〉 グループ討議  
〈ウ〉 事例研究 〈エ〉 現地調査（フィールドワーク）  
〈オ〉 模擬授業

Ⅱ 2 (2) (a) 現在、どのように取り入れられていますか、お書き下さい。

Ⅱ 2 (2) (b) これらの方法の導入に関して何かご意見がございましたら、お書き下さい。

Ⅱ 2 (2) (c) 既設の授業における4つの事項（〈1〉～〈4〉）や実践的な方法（〈ア〉～〈オ〉）の扱いの状況と、新設の「教職実践演習」に必要とされる内容や方法を比較した上で、今後の「教育実践演習」のあり方に関するお考えがございましたら、お書き下さい。

### Ⅱ 3 教職課程の授業での取り組み

Ⅱ 3 (1) すでに「教職実践演習」の内容に相当する授業を開設していますか？

- ① はい（単位あり） ② はい（単位なし） ③ 開設していない  
④ その他

開設している場合、相当する授業の科目名、実践例を教えてください

Ⅱ 3 (2) 現在の教育実習の事後指導について

- ① 充分に行っている ② 改善すべき点がある ③ その他

- Ⅲ 3 (2) s    どのような形で行っているか、どのような点が課題か、よろしければ教えてください。

**Ⅲ    以下の点に関して当てはまる回答に○を付け、検討が必要なことがございましたら、要点を箇条書きで簡潔に記入ください。**

- Ⅲ 1    カリキュラムに関連して、以下すべて「はい」「いいえ」「わからない」の三択（無回答、その他も収録）

Ⅲ 1 (1)    4 年次（短大の場合は 2 年次）後期の開設（中教審答申）は適切とお考えですか？（例えば、教育実習の時期（秋期の場合等）との関係／卒論・教員採用試験受験・就職活動との関係／夏休み・冬休みの集中開講の可能性／他科目の履修状況（履修済・見込み）との関係など）

Ⅲ 1 (2)    教育実習事後指導との関係は明確ですか？

Ⅲ 1 (3)    単位数 2 単位は適切ですか？

- Ⅲ 2    内容及び方法に関連して

Ⅲ 2 (1)    Ⅱ 2 (1) に記載されている「科目に含めることが必要な事項〈1〉～〈4〉」が全体として確認できる授業を編成することが可能ですか？

Ⅲ 2 (2)    教員としての力量をつけるにあたっては、教師塾や初任者研修など、大学外や任用後の養成・研修の機会もありますが、現在の大学における教員養成教育の内容は免許授与に不十分だと思いますか？

Ⅲ 2 (3)    教育委員会や学校現場との緊密な連携・協力は可能ですか？

Ⅲ 2 (4)    履修者数 20 名程度（中教審答申）での展開は現実的ですか？

Ⅲ 2 (5)    例えばロールプレイが 20 人程度で実施できる教室、20 人程度の学生を受け入れてくれる現場、グループ活動のできる教室、それらを指導する教員や TA などが導入までに必要数、確保できますか？

- Ⅲ 3    評価について

Ⅲ 3 (1)    4 つの事項（〈1〉～〈4〉）が学生に形成されたことを確認する方

法は明確ですか？

- Ⅲ 3 (2) 4 年次まで履修してきた学生が単位を認定されなかった（不合格であった）場合の本人及び保護者への対応に問題はありますか？
- Ⅲ 3 (3) 即戦力としての指導力、知識、技術を求めることは必要だと思いますか？

Ⅲ 4 教員に関連して

- Ⅲ 4 (1) 現場経験を持つ教員の任用は可能ですか？
- Ⅲ 4 (2) 担当教員に求められる資質、経験、業績、資格について、4 つの事項（〈1〉～〈4〉）を指導できる担当教員の条件は明確ですか？
- Ⅲ 4 (3) 教科に関する科目と教職科目の担当教員の共同と責任体制を構築し、同時に現場教員との協働を図ることは可能ですか？

Ⅲ 5 実務に関連して

- Ⅲ 5 (1) 事務上、費用上の問題などありますか？
- Ⅲ 5 (2) 科目等履修生等に「教職実践演習」のみの科目履修を許可してよいと考えますか？

<b>Ⅳ 質問・意見（自由記述）</b>
----------------------

- Ⅳ 1 文部科学省に対する今後の進め方への意見や要望をお書きください。  
（例えば、今後の私学との協力関係、個別の事情への配慮、説明会・意見交換会などの開催の可能性・時期・申請スケジュールについて）
- Ⅳ 2 私立大学開放制教員養成の理念の下では、教員にならない学生にも教職課程を履修させています。「教職実践演習」を実施する場合、「開放制の理念」「課程認定大学の責任」等と関連した課題が生じるのではないかと思います。何かご意見があればお聞かせ下さい。

### Ⅳ 3 その他「教職実践演習」への積極的評価や大学教員養成の課題なども含めて、お気づきの点をご自由にご記入下さい。

調査結果の「Ⅳの質問・意見」（自由記述）の項のいくつかについて掲載する。

- 国の教育行政としての長期的ビジョンが不明確である。しっかりした計画を立て、科目の追加・変更を行ってほしい。
- 「教職実践演習」で、設置目的のかなり違う「教職総合演習」を、単に単位合わせのために、安易に廃止するのは、改革の理念を疑う。2000年より、苦勞して充実して来た科目だけに、養成課程に対する理解も見られない。
- 教員採用試験の意味とこの科目の関係がわからない。また、人間の数値では評価できない側面にまで踏み込んだ評価を行うように思え、非常に抵抗がある科目である。
- 4 年次後期に少人数科目を導入することには賛成するが、この科目だけでもって教員に不向きな学生を見つけ出そうとするのは不可能である。本学の場合、教育実習に出る条件に加えて、それ以前に、教育実習内諾依頼をする条件、教科教育法を履修する条件、介護等体験に出る条件などいくつかのハードルを段階的に設けている。
- これまで毎年100名以上の卒業生に免許状を取得させてきたが、その全てに対して「品質保証」ができていないか、と問われれば、正直自信がない。そうしたことが免許状の価値を下げてきた、と言われれば、そうかも知れない、とも思う。もっと少ない人数の学生を徹底的に鍛えたい、という気持ちもある。

学校支援ボランティアに出ている学生は本学の教職履修者の10分の1だが、多くは真面目で熱心で有能な学生である。現場の評価も高い。こうした経験をできるだけ多くの学生に（強制＝必修でもいいから）させたい、と思う。奉仕活動の必修化に際して、自発的なものでなければダメだ、との主張があったが、自発的にやれないからこそ強制しなければならないのだ。

教職実践演習のかなりの部分は学校支援ボランティアの活動と内容的に重なる。今でも、行く学生は学期を通して最低でも週に1コマ、多い学生は丸一日、中には丸二日行っている学生もいる。総合演習を廃止せず、新たに2単位を足す形でもよかったのでは、とも今は思っている。

教職実践演習の理念は分かる。4年次後期、という点が引かかる点であり、また使命感や責任感をどう評価するか疑問は残るが、この科目の導入をきっかけとして既存の教職科目の教育内容を再検討しなければ、と思う次第である。

以上3つの資料をもとに、今回の新科目である「教職実践演習（仮称）」の導入についての問題点と課題を明らかにしてきたが、今後、これらの点を十分に検討し、新科目導入の主旨に応える必要があると考えている。

なお、教職実践演習の新設導入に伴うこれらの疑問や意見に対して文部科学省は、諸研修会での説明や資料等でその理解を図っている。

また、「教職実践演習 Q&A」の件名でメールを送信し、制度全般についての大学側の質問に対して継続して適切な回答を行っている。このことによって、教職実践演習をめぐるさまざまな疑問や意見が順次解消されていると考えている。

### 引用及び参考文献

- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」平成18年7月11日
- 文部科学省初等中等教育局・教職員課「教職課程申請の手引き」平成21年度改訂版
- 東海教師教育研究「中教審答申と教員養成・免許制度改革の実施」22号・23号（合併号）
- 全国私立大学教職課程連絡協議会「2007年教職課程運営に関する研究交流集会」要録（2008年）
- 関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会教職カリキュラム部会アンケート（2008年）
- 全私教協教員免許事務検討委員会報告（平成20年9月～平成21年1月）
- 文部科学省送付資料及びメール（平成20年9月～平成21年7月）



### Ⅲ 「教職実践演習（仮称）」に含めることが必要な事項についての内容研究

#### 3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項

「教育実践演習」では、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として4つの事項から確認する必要をあげている。そこで、ここでは、「3 幼児・児童・生徒理解や学級経営等に関する事項」とかかわりの深い内容について研究を深めてみたい。

具体的には、指導者と子どもとの豊かな人間的な交流が促進されるとともに、子どもの心身の状況に沿った適切な指導が行われ、子どもとの信頼関係に立った学級経営が展開されるのに役立つよう、次の3点から内容を整理する。

A 「児童・生徒理解の今日的課題」

B 「児童・生徒理解とすすめ方」

C 「学級経営の意味と重要性」

#### A 児童・生徒理解の今日的課題

##### (1) 「指導の傾向」からの問題点

児童・生徒理解においては、指導者の側に次のような点からの傾向と、そこから生じる問題点が考えられる。

##### ① 劣り決めつけ傾向から生じる問題点

我が国においては、主として学級の児童・生徒を一斉に指導する授業形態が学校教育において行われている。ただ、このような授業形態では、個人差に対応した一人ひとりの児童・生徒理解とそれを生かした指導が強く求められている。

しかし、「算数が劣っている」とか、「ノートが乱雑」とか、「授業中に私語が多い」とか、児童・生徒の劣った点を基に、その児童・生徒を固定的にとらえてしまい、「よくできる児童・生徒」は注意するのに、「できないとみなした児童・生徒」は当然と見なして注意をしなかったり励ましたりしないのであれば、大変怖いことである。

## ② 優れ決めつけ傾向から生じる問題点

①の逆で、ある教科や運動等が優れているために、他の面も優れていると勘違いし、指導や注意、励まし等が十分行われない場合である。

特に運動能力に優れている児童・生徒の場合、それを鼻に掛け、人間性の豊さといった点から見て、あまり好ましくない児童・生徒がいる場合があるが、それに気付かなかったり、気付いても指導しない場合である。

優れた点があるために十分な指導・助言を受けられない児童・生徒も可哀そうである。

## ③ 指導の決めつけ傾向から生じる問題点

教育活動は、指導者と学習者である児童・生徒との相互交わりによって、学習者が学習内容を学び取っていく営みである。

この場合、指導者は指導内容をしっかり身に付けさせるために教材研究をし、指導方法の研究をして児童・生徒の指導に臨む。

そのため、指導内容をよく理解できない児童・生徒に対して、指導者側に問題があっても認めようとしなかったり、理解できないのは児童・生徒の側に責任があると考えられる場合である。

指導者側が責任を認めず、時間不足を理由に個々の子どもに即した具体的な指導の手立てが施されないケースは、多くの学校・学級で発生しているのではないかと考える。

#### ④ 表面的なとらえ傾向から生じる問題点

国語の学習が好きだと言う児童・生徒の場合でも、その理由を確かめると、「先生の雑談が面白いから」「新しい言葉や漢字を学ぶから」「友達と意見を述べ合いながら学習できるから」といろいろな理由が出てくる。

「先生の雑談が面白い」ということが理由であれば、それは、国語の学習に対して受け身であることを示しているし、「新しい言葉や漢字を学ぶから」ということが理由であれば、学び取る喜びを示している。「友達と意見を述べ合いながら学習できるから」ということであれば、国語の学習に対して意欲的であるし、指導者が学び合う学習を大切にしていることが考えられる。

このように、教科の好き嫌い一つ取っても実際は複雑であるのに、表面に現れた「〇〇が△△」と児童・生徒が反応したことのみで、指導者に都合のよいように児童・生徒をとらえることは、前述の③同様、指導者が陥りやすい問題点である。

#### ⑤ 外的要因決めつけ傾向から生じる問題点

児童・生徒は各家庭から学校に送り出されるが、家庭によっては極端に貧しかったり保護者が学校に対して批判的であったりする場合がある。

このような場合、児童・生徒には関係が無いのに、これらの外的な要因を理由にして「学力の無さ」「素行の悪さ」を決めつけてしまい、個々の能力や個性に即した指導をしないとしたら、問題である。

特に、児童・生徒の責任ではないのに、外的な要因が学力面や性格面への悪影響を及ぼしている場合も多く、それらの要因とからめて児童・生徒を温かくとらえ指導しないと、子どもの健やかな成長は図られない。

以上、5点から「指導の傾向と問題点」について述べてきたが、この5点は代表的な例であり、実際は、これらの要因が複雑に絡み合い児童・生徒の指導の理解や指導にあたっただけの問題点を生み出している。

## (2) 「子どもの学習行動の捉え」からの問題点

学習している子どもの学習行動面からは、次の点からの傾向と問題点が考えられ、児童・生徒を理解する上での課題となっている。

### ① 学習意欲をはぐくむ中での問題点

学習内容に対して、児童・生徒が働きかけ、それを習得するまでの行動の裏には様々な欲求がある。

例えば、次のような欲求である。

- ・ 社会的な欲求……愛されたい、認められたい、集団に所属したい…
- ・ 自我欲求………対面を保ちたい、独立したい、優位に立ちたい…
- ・ 自己実現の欲求…獲得したい、成就したい…

したがって、児童・生徒が学習する際は、教師から認められようとして、また、学友に受け入れられ安定したいという欲求を充足しようとして生起することもあるし、自分の対面を保とうとする欲求、級友よりも優位な地位を得たいとする欲求を満たすたそうとして生起することもある。

これらの欲求による学習行動の特色は、学習そのものが目的ではなく、学習行動の裏にある諸欲求を満たすための手段になっていることである。

これに対して、「新しい知識を獲得したい」「○○になるために学びたい」「○○ができるようになりたい」といった欲求ををもって学習に臨む場合は、学習そのものが目的となっているので、目的が充足されることによって、さらに高い目標に向かって意欲が高まることになる。

手段としての学習行動となっている場合は、学習者自身の内面から生まれる意欲や積極性、自主性が育ちにくいことになる。

このことから、指導者は、学習行動の裏にある諸欲求を満たすように一方では十分配慮するとともに、他方ではしっかり教材研究をし、「何を学ばせるのか」「子どもが自ら学習内容を獲得するにはどう学習を展開したらよいか」等、努力・工夫する必要がある。

このことがあって初めて児童・生徒の学習中における真の理解ができるのであるが、指導者の中にはこの点の自覚が欠け、ただ単に教え込んでいる場合や、学習そのものの面白さを重視しない学習指導が往々にしてあり、学習意欲をはぐくむ中での問題点となる。

## ② 学習中の個人差への対応からの問題点

学習内容に対して疑問や問題意識をもって児童・生徒がかかわり、その解決のための過程が充実するように指導者が個々を理解しながら指導に当たった場合でも、次のような点からの問題がある。

学習が児童・生徒の強い問題意識や必要感から始まったにせよ、学習そのものが安易過ぎると興味を失うし、難し過ぎると意欲を無くしてしまう。

このことは、学級で学習指導を展開している中で随時発生することである。

例えば次のような場合である。

- ・「何を調べたらよいのか」
- ・「何をどうまとめたらよいのか」
- ・「何で調べたり、誰に尋ねたりしたらよいのか」
- ・「何を発表していいのか」
- ・「調べることが学習の流れの中でどのように位置付けられているのか」

等が分からずにいても、指導者が個々の児童・生徒の学習状況の理解が十分にできずにいて躓きに対する適切な指示や指導、支援等が行なわれないため、学習意欲を無くしてしまう問題である。

ただ、躓いているからといって、安易に正解を教えたり調べ方等を指示したりしていたのでは、努力・工夫しながら問題を解決する場を奪ったり克服できた時の成就感が味わえないことになったりするので、指導者は常に個々の児童・生徒の学習状況を把握・理解し、それに対応した適切なかわりが求められる。

③ 学習者の内面理解と指導の面からの問題点

学習を進めるにあたっては、事前に児童・生徒がその学習に対して「どのようなかわりがあるのか」「理解度はどの程度か」「問題を調べて、自分の考えをまとめたり発表したりする力がどの程度か」といった実態を十分把握・理解し、それに対応した指導のための準備をすべきである。

また、学習が実際に展開される中では、個々の子どもが「どんな問題意識をもって学習に取り組んでいるのか」「どこで躓いているのか」「追究に当たっての興味・関心は何処にあるのか」「新たに生まれた疑問は何か」といった追究の方向等もしっかり見定める必要がある。

しかし、傾向としては、「教える内容についての研究」、つまり、教材研究についてはよく行われるが、教える内容と学習者との関係、かかわりの程度、興味・関心の対象等についての理解が不十分である。

また、学習の展開の中では、まさに個々の意識や理解の程度、個人差等の理解とそれに対応した手だてが必要であるが、内容の指導が中心となり学習者の立場に立っての指導が疎かになりがちである。

以上、「児童・生徒理解の今日的課題」について、「指導傾向」と『『子どもの学習行動』からの問題点』に分け、整理したが、学習指導の中では、これらの問題点が複雑に絡み合い発生している。

## **B 児童・生徒理解とすすめ方**

### **(1) 児童・生徒理解とは**

児童・生徒理解とは、児童・生徒がよりよく成長できるよう、指導者が限らない関心と愛情をもってかかわり支援することことである。

### **(2) 児童・生徒理解のための基本姿勢**

指導者が児童・生徒を理解する際の基本姿勢としては、次の5点が大切である。

### ① 人間的な共感をもった理解

まず、指導者が児童・生徒を理解するには、まず、指導者に「人間としての共感」をもって理解しようとする姿勢が必要である。児童・生徒は、指導者からみれば未熟であるが、「一人の人間としての尊厳をもった存在」であり、指導者と等しい立場にあることを基盤に据えることが大切である。

そのためには、次の3点が基本となる。

- ・児童・生徒の身になって考える。
- ・児童・生徒の気持ちになって感じ合う。
- ・児童・生徒の目の高さになって理解する。

### ② 客観的な理解

指導者が、自分だけで児童・生徒を判断し理解すると、指導者の主観に流れる場合がある。

また、狭い範囲で児童・生徒を理解した場合、「よさ」や「不十分さ」の程度が、明確にならない場合が多い。

したがって、できるだけ児童・生徒を客観的に捉え正しく理解できるよう、他の指導者の意見や検査・調査など多様な方法を取り入れ、それを基に児童・生徒を総合的にとらえ、真の姿が理解できるよう努力する必要がある。

発言する言葉は攻撃的でも、作文等に現れる内面には思いもよらない悩みや弱気な面をもっているものである。

### ③ 「よさ」の理解

児童・生徒には一人ひとりに「よさ」があるととらえ、その「よさ」を探し、理解し、励ますように努力すべきである。

学力的には劣っていても、よく努力する児童・生徒には、その努力の素晴らしさを認め励ますこと、特に興味・関心を示す対象や領域、これからも大切にして欲しい姿等は、常に把握し、その都度認め励ますことが大切

である。

また、児童・生徒には、誰にでも得意な分野とそうでない分野がある。

例えば、「運動は得意だが算数・国語は苦手である。」「図画工作は得意だが、歌が上手にできない。」「友達と一緒に活動するのは好きだが、一人でこつこつと努力するのは苦手である。」等である。

このような場合、得意な分野で発揮されるその子の「よさ」を認め励ますことは勿論であるが、不得意な分野でも、その中にある「よさ」に留意しながらその子を捉え指導に当たることが大切である。

#### ④ 個々に即した理解

児童・生徒を理解するにあたっては、あくまで一人ひとりに即して行われることが大切である。

なぜなら、児童・生徒は一人ひとり能力も個性も育った環境も異なるからである。

したがって、「国語の学習が好き」「体育が嫌い」と言っても、その理由は一人ひとり異なっている。例えば、「新しい漢字や言葉を覚えられるから国語が好き」「音読が上手くでき、いつも先生から褒められるから国語が好き」「水泳が苦手なので体育が嫌い」「バスケットは好きだが、冬には持久走があり友達よりも遅くなるから体育が嫌い」等である。

一見、同じように見えても、一人ひとりとは異なっているとらえておくことが、児童・生徒を正しく理解することになる。

#### ⑤ 個と集団との関係の中での理解

児童・生徒を指導者が理解するには、指導者と一人の児童・生徒との関係でのみ捉えるのは不十分である。

なぜなら、児童・生徒は、家族や友人、属している学級や学校、地域の中で生活し成長している。また、集団には個人にない力が働き、個人の成長を促している。



したがって、指導者は、常に集団の性格や傾向、その中での個々人の位置や関係（リーダーか、リーダーに付いて回るタイプか、フォロアーシップをもっているか、自分の意見ばかりを主張するタイプか、〇〇がよく一緒に行動しているのは誰か、友達〇〇の意見にはよく耳を傾けているが〇〇の意見にはムキになって反対意見を述べている等）も的確に把握することが児童・生徒を的確に理解することになる。

### （３） 児童・生徒理解の観点

児童・生徒理解を進めるにあたっては、前述した「教師の基本姿勢」を踏まえながら、次のような三つの観点が前提として必要である。

#### ① かけがえのない存在としての愛情（指導者から児童・生徒へ）

どのように、優しい言葉をかけても、児童・生徒に、自分が受け止めてもらっているという実感がなくないことには、児童・生徒が指導者の言葉掛けを受け入れようとはしない。特に、児童・生徒に対する理解が必要なのは、弱い立場の子どもや、悩みをもった状況の場合である。

したがって、できない自分、弱い自分、だめな自分でも受け止めてもらえる、存在を認めてもらっていると感じ取らせるかかわり方が大切である。

このことがあって初めて、児童・生徒は心が安定し、心を開き、自らの意思で成長しようと努力する。

#### ② 児童・生徒の内面理解

児童・生徒は、指導者が自分の心の中をよく理解してくれていると分かって初めて、指導者に心を開く。また、どの児童・生徒も指導者と親しく話し、触れ合うことを求めている。その触れ合いは、日常の学習の場面や生活の場面である。したがって、その場その場での指導者の児童・生徒へのかかわりの機会を児童・生徒理解の機会ととらえ接することが大切である。

### ③ 早期発見・早期対応

児童・生徒の心の状態を早めに理解し、よりよい方向へと導くことは指導者として最も大切なことである。

問題の発生には必ず「兆し」があり、それをいかに素早く発見するかがポイントである。

次のような場合は、児童・生徒の内面に問題を抱えている場合が多い。

- ・友人関係でのトラブルが多くなる。——喧嘩、口論、乱暴、物隠し
- ・基本的な生活習慣が乱れてきた。——遅刻、服装、忘れ物
- ・生活態度に張りが無くなってきた。——無気力、無関心

### (4) 児童・生徒理解の方法

児童・生徒理解の方法には、理解する目的や内容、発達段階等に対応した次の五つの方法が考えられる。

#### ① 観察による児童・生徒理解

まず、日常の児童の自然な姿をありのまま観察することが大切であり、観察の場面としては、次の場面が考えられる。

- ・学習時間、係り活動、クラブ活動、給食、清掃時間、休み時間、登下校等

また、遠足や運動会、学習発表会などでは、日常の生活とは違った姿の観察、つまり、社会性の発達や集団での行動の様子などの観察ができる。

ただ、「こんな子どもだったのか」「なるほど…」「どうしてかな…」と心に残るようなことは、短い文でいいから記録し積み上げることが大切である。

「なるほど…」と言う面はその子の個性や特徴を肯定的に受け止めていることになるし、「どうしてかな…」と受け止める場合には、子どもの見方の偏りや子どもの側からの何らかのサインが出ていると考えることが大切である。

したがって、気付いたこと、思ったこと、指導したりかかわったこと、

その時の子どもの反応等を後で整理し、指導に生かすことが大切になる。

個人毎のカルテを作成し、長い目でその子を理解することが必要である。

## ② 遊びや作業を通しての児童・生徒理解

遊びや調理、木工、手芸、園芸、栽培、飼育といった体を使った活動は、子どもが大好きであり意欲的に取り組む。

したがって、具体的な活動を子どもとともに進めると、そこに表れる子どもの姿や指導者のかかわりに対する子どもの反応が直接捉えられ、児童・生徒をしっかりと理解することができる。

具体的な活動や体験は、幼児や小学校低学年の児童へは勿論であるが、小学校中・高学年、中学生以上にも、目的を明確にして積極的に取り入れることが求められている。

指導者が子どもとともに汗を流すことによって生まれる信頼感や親しみは、測りしれないものがあり、ここで子どもが本心を吐露したり本来の姿を見せたりすることになる。

## ③ 面接による児童・生徒理解

面接にはいろいろな形態やその目的も様々であるが、ここでは小学校の担任が児童理解や生徒指導の目的で実施する場合の基本的な態度、応答の仕方についてのみ述べる。

### 〈面接を実施する際の基本的な態度〉

- 1 児童の訴えや考え・思いに耳を傾け、ひたすら心を込めて聞く。
- 2 相手の立場になって考える。
- 3 相手の全てを受け入れる。よいところ、悪いところ、弱いところの全てを受け止める。
- 4 自らの意思や自己決定したことを重視し、それを支え励ますようにする。

〈面接場面における応答〉

- 1 相手の感情を短い言葉で肯定的に受け入れる。
- 2 訴えている言葉の大切な部分を教師が繰り返し応じてやる。
- 3 児童の言葉の背後にある感情を推し量り、核心だと思われるものを明確な言葉で確かめる。
- 4 児童の話や訴えをひととおり聞いたら要約して児童に返してやる。
- 5 児童の悩みや苦しみを引き出すように応答する。単純な一問一答による対応や取調べにならないようにする。

④ 作文・日記・作品などによる児童・生徒理解

作文や日記、絵や工作など、児童・生徒の心の内面が投影されると考えられる文章や作品を通して、悩み、願い、喜びなどを感じ取り、指導に生かすことができる。

ここでは、作文と日記による児童・生徒の理解のための要点を整理する。

〈作文による児童理解〉

作文や読書感想文から、本人の願望や自己受容、自己認知の度合い、考え方や悩み等を知ることができる。

作文の場合、「お父さん」「お母さん」「家族」「わたしの友達」「自分について」などの題の場合は、表現の中に本人を理解するのに役立つ内容が見られる。

ただ、作文を読み、洞察や解釈ができる教師の力量や柔軟な思考力、温かい愛情が必要であり、指導者は自己の資質の向上に努める必要がある。

〈日記による児童理解〉

日記では、文章を通して教師と子どもとが対話でき、表面的な理解から内面的な理解まで可能となる。特に、小学校低学年の段階で利用しやすい形式である。

個人日記での児童理解の長所・短所、指導の留意点を整理すると次のようになる。

**\*\*\* 個人日記の長所 \*\*\***

- ・担任に直接話しにくい内容も日記には書ける。
- ・教師に話しかけるのが苦手でも、自分の思いを伝えられる。
- ・個人の秘密が保たれる。

**\*\*\* 個人日記の短所 \*\*\***

- ・文章表現力がないと書けない。
- ・教師が期待する内容を書くとは限らない。
- ・子どもとの信頼関係が成立していないとできない。

**\*\*\* 個人日記指導の留意点 \*\*\***

- ・どんな内容でも肯定的に受け止める。
- ・表現の仕方等について細かく注意しない。
- ・提出された日記には早く目を通し「コメント」を添え返す。
- ・公表する場合は本人の了解を得る。

⑤ 調査による児童・生徒理解

学級の児童・生徒の数が多くなると、短期間に全員の実態を把握したり、集団内の人間関係を理解するするのが難しくなる。

そのため、質問紙を用意して調査を実施し、実態を把握する方法が用いられる。

調査結果から、個別に援助することが必要な児童・生徒を発見したり、保護者との話し合いをもって早期に指導・援助することが可能となる。

調査法の長所・短所、調査内容例を整理すると、次のとおりである。

〈調査法の長所〉

- ・ 同一の条件で、同時に多数の実態を把握できる。
- ・ 短期間に資料が集められる。
- ・ 子どもたち全体の傾向等を把握することができる。

〈調査法の短所〉

- ・ 読解力や表現力に頼る方法なので、発達段階に即した設問が必要。
- ・ ありのままの自分の姿を表現しない場合がある。
- ・ 調査への意欲が低いと、正確な実態を把握できない時がある。

〈調査内容の例〉

- ・ 個人の性格、習慣、興味・関心、悩みなど。
- ・ 学校の生活、学習、友達関係、教師との関係など。
- ・ 家庭や地域における生活、人間関係など。

質問形式で実施されることから質問紙法とも呼ばれる。

また、実施する場合は、質問内容と適用範囲を十分検討すること、子どもが意欲をもって臨むように事前にどう指導するか検討しておくことも大切である。

(5) 児童・生徒理解と指導過程

児童・生徒を理解し、よりよい方向へ育てるためには、問題を抱える子どもへの対処という「治療的な生徒指導」だけでなく、子どもの発達や興味・関心の広がりを援助する「開発的な生徒指導」、問題に直面した時の対応力を育てる「予防的な生徒指導」まで考え子どもを育てることが大切である。

① 開発的な生徒指導

「開発的な生徒指導」とは、子どもと教師がかかわりを深め、自己存在

感、自己決定の場や共感的な人間関係づくりを大切に、子どもが本来もっている「よりよくありたいとする気持ち」を自覚、高めさせ、実現を目指す指導のことである。

昨今の少年犯罪の状況や荒れた学校を解決するには、「その場しのぎ」を繰り返す対処的・治療的な生徒指導だけでは、限界がある。

子ども同士の人間関係のトラブルや様々な問題行動が大きくなる前の段階で食い止めるには、管理職を中心とした教師集団としての「学校力」が必要である。また、子どもたち自身が様々な問題を自分たちの問題としてとらえ、問題行動を発生させない集団へと高めていける自発的・自治的な能力を指導を通して育てることが大切である。

具体的には、教育課程内外の教育活動を着実に展開することであり、各教科の授業中における積極的な生徒指導はもとより、全教育活動を一人ひとりが確かに育つより望ましいあるべき学習活動へと高めることである。

## ② 予防的な生徒指導

「予防的な生徒指導」とは、問題をもったり潜在していたりする子どもを対象とし、学習や学級の人間関係のつまずきなどの兆候を早期に発見し対応していくことである。

たとえば、「行きしぶり」が見られる子どもを別室に登校させることにより、不登校を回避する「心の居場所」づくりはその典型である。

また、いじめがおきないように、道徳の時間の指導を子どもの生活や実態に合わせて重点化したり、学級活動の時間に、学級の問題を子ども自ら解決していくように生かすことである。

ただ、予防的な生徒指導を推進するには、「常に、一人ひとりの子どもに目を向け、元気にしているかな？大丈夫かな？」という危機意識をもつことと、発見された兆候に対しての予防的な対応のできる「学校力」としての教師集団・学校体制を確立することである。

### ③ 治療的な生徒指導

「治療的な生徒指導」とは、問題が顕在化している子に対して、治療プログラムやカウンセリングによる指導を行うことである。

ここでは、問題行動を抑えることが主となり、スピード違反の取締り的な生徒指導になりがちである。この場合、荒れてしまった学校・学級では、問題行動に対する適切な対処、度重なる家庭訪問、地域や関係機関との連携、「出席停止措置」など、教職員がチームを組んでの組織的な対処・対応ができる学校体制としての「学校力」が求められる。

昨今は、家庭の教育力の低下・子どもを取り巻く教育環境の変化もあり、問題行動がどの学校・学級でも発生する可能性があり、個々の学級・教師がしっかりしておけば学校全体がうまくいくという時代ではなくなっていることを認識する必要がある。

## C 学級経営の意味と重要性

### 1 学級経営

#### (1) 学級経営と教育効果

学級は、学校において子どもたちが学習したり生活したりする際の制度的につくられた一つのまとまった集団である。この集団は、はじめから協力しながら学習や生活を進めることのできる集団ではなく、担任を中心とした指導者が意図的・計画的に児童・生徒を「励まし合い・協力し合う集団」となるよう指導・助言するとともに、それを支える条件の整備を重ねることによりつくりあげられる。

このことは、学習指導とは直接関係ないことであるが、「励まし合い・協力し合う集団」となるか否かは、学習効果を上げる上で大変重要なことである。

なぜなら、「励まし合い・協力し合う集団」となれば、互いに学び合う集団・助け合う集団となり、学力面は勿論、心身の発達の面も大きく伸びることになり、学級が目指す姿、ひいては、学校全体が目指す学校教育目標の具



現化をもたらすことになるからである。

したがって、小学校においては学級担任に、中・高等学校においては学級担任と教科等の担当者との連携により、「励まし合い・協力し合う集団」をつくり、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等、全教育活動を通して一人ひとりの子どもの能力や態度、心身の健やかな成長を促すための指導力、そのための努力が求められる。

特に今日では、無気力・無責任・無感動・無関心な子どもの発生、いじめや不登校・青少年の問題行動の多発と、指導者を悩ませる状況が増大する傾向にあり、学級担任を中心とした学級経営の役割が非常に大きくなっている。

## （２）学級経営の内容

学級をしっかりと経営していくためにどんな仕事があるのかをしっかりとらえ、意図的・計画的に学級経営を進めることが大切となる。

整理すると、次の五つの内容が考えられる。

### ① 児童・生徒の理解

学級経営は、一人ひとりの子どもの実態をしっかりと把握するところから始まる。把握する項目としては性格、能力、学力、健康状態、考え方、興味・関心の対象、悩みや将来の夢等であるが、性格、能力、学力、健康状態等は前の担任との引き継ぎや残された資料等である程度は分かるが、考え方、興味・関心の対象、悩みや将来の夢等は刻々と変化するので、日々、個々の子どもとかわり把握することが大切である。

また、児童・生徒の理解に際しては、子どもの欠点に目を向けるより、どんな「よさ」があるのか、「成長していることは何か？どの程度か？」など、「よさ」や「成長」を重視することが大切である。

また、生徒指導上の問題や、悩み等は素早く把握し、適切に解決できるよう努力する必要がある。

## ② 学級集団づくり

児童・生徒は、将来、社会の一員として、その責任を果たしていくことが求められる。

そのためには、社会の縮図でもある学級という集団の中で発生する問題を協力し合って解決したり、学級で掲げた目標の実現に向けて互いに努力し合う学級へとつくり上げる必要がある。

学級担任は、一人ひとりの考えや意見を大切にしながら、集団のもつ個々に与える影響力・教育力を生かして学級集団を組織し、豊かな学級文化を創り出す目的的な集団へと高まるようつくり上げるのが、一つの大きな仕事となる。

## ③ 学習環境の整備

子どもは、取り巻く環境の中でその影響を受けながら成長する。学校では、学級が子どもたちの学習と生活の場となる。したがって、学級担任は、学級での学習環境を整備することが大切となる。

この場合、学習環境には、学級担任と学級の子どもたちとでつくる人的な環境と、物的な環境である教室の照明施設、机や椅子、黒板、掲示板や掲示物、パソコンやプロジェクターなどの教育機器、教材・教具、図書等がある。

教室環境の整備にあたっては、その教育的な意味や機能を明確にし、子どもたちの安全と健康に配慮した努力、図書の配置・机や椅子の配置・掲示物の内容や掲示の仕方等に教育的な配慮と工夫が必要である。

また、子どもたちの発想を生かしながらの教育環境づくりは、子どもたちの主体的なかわりを生み出すためにも大切である。

## ④ 保護者との連携

保護者は、学校において、我が子にどのような教育が展開されているか関心も高く、また、期待も大きいものがある。

そのため、保護者に教育活動のもつ意味をよく説明しながら子どもの指導にあたるとともに、保護者の願いや期待を受け止め、学級担任と保護者が相互に理解を深めることが必要になる。

したがって、保護者との信頼関係を築く努力（仕事）は、子どもの指導とは直接関係ないが、教育効果を高める上で大切である。

#### ⑤ 学級事務の処理

学級担任には、子どもの指導の他に学級事務を処理する仕事がある。指導要録、出席簿などの公簿の記入と整理、保管、転入・転学などの報告文書の作成と処理、備品や教材の整理・保管事務、学級会計処理事務、学級経営案、週案の作成など、多岐にわたる。

これらの事務を迅速かつ適切に処理していくことは、学級・学年・学校で行う教育活動を充実させるための大切な前提条件となり重要である。

### （３） 学級経営の基本と進め方

学級経営にあたっては、学校教育目標と関係付けながら学級で何を目標にみんなで努力するのかを明確にし、その実現のための条件の整備を担当が児童・生徒と共に努力すること、また、そのための指導法の究明や手順の理解などが大切になる。

学級経営の基本と進め方を「学級教育目標のもつ意味」「学級教育目標作成の手順」「学級教育目標達成を目指す指導計画の作成」「学級集団づくり」「生活習慣づくり」「教育環境づくり」の６点から整理すると、次のようになる。

#### ① 学級教育目標のもつ意味

学校における日々の教育活動を方向付け、指導者と児童・生徒が一体となって学級の課題を克服し調和のある学級経営を行うための指標となるのが学級教育目標である。

学校には、学校全体の子どもたちが身に付けて欲しい目標としての学校教育目標があるが、一般的、包括的な目標になりがちである。

したがって、学校教育目標をさらに具体化し、学年化・学級化する必要がある。特に各学級には各学級の課題や願いがあり、それを生かした学級教育目標をつくることは、学級経営をする上で大切になる。

学級教育目標の具備すべき条件を整理すると、次のような点が考えられる。

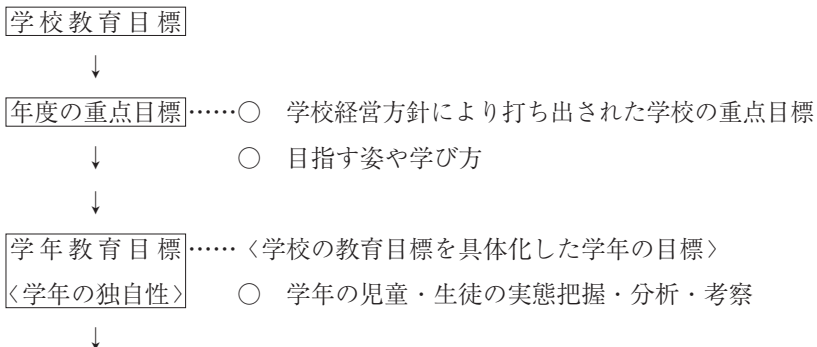
### く 学級教育目標の具備すべき条件 く

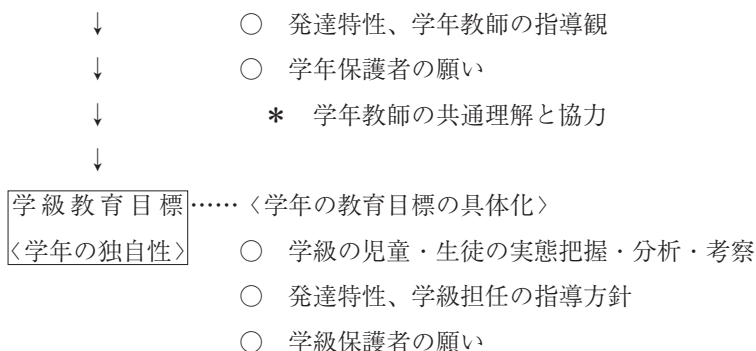
- 1 学校教育目標、学年教育目標と関連し、具体化・学級化されている。
- 2 1を踏まえ、発達段階に即した目標となっている。
- 3 学級担任の望ましい教育観に立ち、適切かつ簡潔な内容・表現である。
- 4 学級の子どもの実態や保護者の願いに基づいている。
- 5 学校経営・学年経営に組み込まれ、全教職員の共通理解の上に立っている。

## ② 学級教育目標作成への手順

学級教育目標の作成にあたっては、学校教育目標の具体化であることから、学校→学年→学級の流れを踏まえて作成することが大切になる。

作成には、例として次の様な手順が考えられる。





学級経営を充実させ学級教育目標を達成させるためには、

まず、①学級担任を始めとした指導者が、児童・生徒をしっかりと理解することが大切である。

なぜなら、個々の児童・生徒をしっかりと把握できることにより、個々の子どもの「よさ」をとらえて称賛したり励ましたりできるからである。また、不十分な点や悩み等も分かり適切な指導や支援をすることができるからである。さらに、このことが個々の子どもたちの意欲を引き出すとともに個々の子どもを確かに育てることになるからである。

次に、②各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の指導の充実を図ることである。

子どもたちは、学校での生活の大部分は各教科・道徳・特別活動等、学習する中で過ごす。したがって、教科等の本質をよく理解し、基礎的・基本的な内容をしっかりと子どもたちが身に付けるよう教材研究を深めるとともに、具体的な活動や体験を通して子どもたちが、自ら学習内容を学び取って行く指導の在り方を研究することが大切である。

子どもたちには、毎日毎日の学ぶ喜びがあって、始めて充実した学級生活、学校生活が生まれてくる。

そして、③教科等の指導と、生徒指導、安全指導などを関連させながら

総合的に学習活動や学級生活を展開させ、学級教育目標の達成に向かうようにすることである。

そのためには、教育活動の進め方や内容、子どもの実態についてしっかり把握するとともに、展開する前にどうすることが適切かを確認し、子どもが着実に育つための綿密な計画を立て実践するとともに、実践の成果や残された課題等を整理し、課題の解決に向けたたねばり強い取り組みが必要となる。

学級で必要な「指導計画」や「指導計画作成上の留意点」を整理すると、次のようなものが考えられる。

#### く 学級で必要な「指導計画」 〉

- ・ 年間計画……各教科の単元一覧、重点指導事項、道徳の年間指導計画、学級活動の年間指導計画、総合的な学習の時間の年間指導計画、生徒指導の年間指導計画、保健・安全・給食指導の年間指導計画等
- ・ 月・週計画…各教科、領域等の月・週における指導内容予定表、生徒指導計画、月・週の学校行事予定表など。
- ・ 日 案………日課表、各教科・領域等の学習指導案など。

#### く 学級の「指導計画作成上の留意点」 〉

- 1 学校全体の指導計画・学年の指導計画との調和を図り、かつ、学級の実態に即し、教科等毎・領域等毎、相互に関連付けながら総合的な学級の指導計画を立てる。
- 2 各々の目標設定にあたっては、学校教育目標との関連、発達段階や指導内容、育成計画の系統・発展を考慮する。
- 3 学習目標と生活目標との関連を明確にする。
- 4 学級経営の重点に沿って内容が精選され、展開される教育活動が充実するようにする。

- 5 1年間を幾つかに区切り、「〇〇まで（期限）に、〇〇まで（育成の程度・段階）育てる」と、具体的な目標を設け評価しやすいようにし、成果と課題を確認しながら段階的に育てられるようにする。
- 6 個々の子どもの実態を把握し、個々の子どもが確かに成長できるようにする。
- 7 管理職への進捗状況の報告や同学年の教師・それ以外の教師との情報交換をも密にし、よりよい学級経営の在り方を学びながら進めるようにする。
- 8 保護者や地域にも学級経営の状況を報告したり要望等も取り入れながら指導計画を立て、協力が得られるようにする。

#### ④ 学級集団づくり

子どもたちは、学校では主に学級単位で学習をしたり生活することになる。したがって、学級担任は、学習意欲・生活意欲に満ち、互いに協力し合う学級となるよう指導することが大切である。

この場合、「学習活動を行う場としての学級集団」「集団活動を体験する場としての学級集団」「望ましい人間関係をつくる場としての学級集団」が考えられる。

いずれの場合も、子どもたちとしっかりと向き合い、子どもたちの「よさ」をしっかりと見取り、自主的・自発的に活動し、互いに協力し合いながら学び取っていくような集団へと育てることが大切である。

特に学習活動においては、つい教えることに重点がかかり過ぎ、互いに学び合う集団へまで育たない場合がある。

子どもたちに任せられるところは任せ、子どもたちが友達の考えを大切にする集団、互いの考えを基にいての更に深い考えを創り出すことのできる集団へと育てることが学習集団づくりでは大切である。

そのためには、指導者は、しっかり教材研究をすると共に個々の児童・

生徒の考えや興味・関心、願い等を把握し、それらを学習活動に生かす努力や工夫が必要になる。

学級集団づくりの際に留意すべき内容として、次の3点が考えられる。

### ＜ 学級集団づくりの留意点 ＞

#### 1 児童・生徒の理解と指導

よりよい学級をつくり上げ、個々の子どもの学力や社会性を育てるためには、次の点から個々の子どもを把握することが必要である。

##### (1) 能力や学力の実態をとらえる。

能力や学力の実態をとらえる客観的な方法としては、「知能検査」「学力検査」等を活用するのが一つの方法である。しかし、いずれの検査も、その結果の数値だけで結論を出すのでは、子どもの実態を正しくとらえることにはならない。それは、児童・生徒のもつある一部分であり、様々な場面で表出される姿やその他の調査結果を基に多面的に子どもの実態を把握することが大切である。

##### (2) 性格や興味・関心、願いをとらえる。

単に能力や学力をとらえるだけでなく、子どもの性格や興味・関心を把握することも、よりよい学級をつくり上げるためには大切である。

なぜなら、子どもの性格や興味・関心、願いを把握することは、学習の場や生活の場を整備する際に、また、個々の児童・生徒にかかわる場合に、どうしたらよいかを示唆する貴重な情報となる。

性格を知る一つの方法として、「性格検査」がある。しかし、これこそ、日頃の生活の場や学習の場で見せる姿を記録にした個人カルテを作成し、総合的に個々の子どもをとらえることが大切である。

##### (3) 生活背景や家庭環境をとらえる。

子どもたちは、一人ひとり生活背景や家庭環境が異なるが、これらは、子どもの性格や考え方、学力等に大きな影響を与えている。

したがって、直接、家庭訪問をしたり、家庭の理解と協力をお願いして調査書を配布し、その結果の分析から実態を把握したりする。



以上、児童を理解するための実態の把握の仕方・生かし方等について述べたが、いずれにしても、調査結果は担任だけが独占するのではなく、関係の教師にも指導資料として提供し、活用を図ることが大切である。ただし、この場合、守秘義務を遵守すること、情報の保管・管理を徹底する必要がある。

## 2 小集団を生かした指導

小集団をつくり学習や活動を展開することは、個々の子どもたちが自分の意見や考えを出しやすくなり、協力して学習や活動をし、その結果としてお互いに学び合うことになる。

このことは、一斉学習や個人学習では得られない貴重な体験をすることにも、学習の効果を高めることになる。

ただし、より効果を高めるためには、次の様な点に留意することがポイントである。

- (1) 係活動と当番活動の違いを明確にした組織にする。
- (2) 各係の目的や活動内容をあらかじめ理解させておく。
- (3) 適切に評価し責任感が高まるようにする。
- (4) 過度の競争意識をもたせないようにする。
- (5) 小集団間の人数のバランスを考える。
- (6) 活動しやすい環境をつくる。

## 3 集会活動の指導

学級活動における集会活動は、学級での生活を一層充実・向上させるため、学級の全ての子どもが集まって行う活動である。そこでは、話し合いながら活動や役割が分担され、活動を通して学級への愛着が深められる。

そのため、子どもたちの主体的な活動が促されるよう、また、活動の楽しさを子どもたちが味わうことができるよう指導者は努力することが求め

られる。

活動が充実するためには、次のような点に留意する必要がある。

### (1) 活動過程と指導

子どもたちが、「自分たちの力で立派な集会ができた」という達成感・充実感をもたせるようにすることが大切です。

そのために指導者は、計画の段階から実施・評価まで、子どもたちの考えが生かされるよう配慮する必要がある。

整理すると、次のようになる。

〈事前の活動〉… 1 集会の内容を決める。

↓

2 実施計画案を立てる。

↓

3 計画案を検討する。

↓

4 集会のめあてを決める。(学級・自分のめあて)

↓

5 集会の準備をする。

↓

〈当日の活動〉…集会活動を実施する。

↓

〈事後の活動〉…集会活動の反省をする。

- ・感想をまとめる。
- ・発表し成果や反省点を話し合う。
- ・話し合った結果をまとめる。

### (2) 活動計画

### く 活動計画の例（中学校）

1	集 会 名	フットベースボール集会
2	集会のめあて	ルールを守り、力を合わせて最後まで頑張る。
3	日 時	〇〇月〇〇日（ ） 4 校時
4	会 場	校 庭
5	進め方と係	(1) ピッチャーが投げたボールを足で蹴る。 (2) 試合は5回までで勝敗を決める。 (3) 4チームつくり予選・決勝を行う。 (4) A、Bの2コートで試合をする。 (5) 係…挨拶、宣誓、準備、得点、審判、賞状 (6) その他…勝ったチームに賞状
6	集会のプログラム	(1) 始めの言葉——挨拶係り (2) 宣 誓——選手代表 (3) 試 合——予選、決勝 (4) 成 績 発 表——係り (5) 先 生 の 話 (6) 終わりの言葉——挨拶係り
7	後 始 末	全員が協力して片付ける。

### (3) 自己評価の例（中学校）

氏 名 ( )

{フットベースボール集会の反省} ……(はい◎ 普通◎ いいえ△)

- (1) 集会は楽しかったか? …… ( )
- (2) 友達と協力できたか? …… ( )
- (3) 決まりは守れたか? …… ( )
- (4) 準備や後始末はきちんとできたか? …… ( )
- (5) 係りの仕事は責任を果たせたか? …… ( )
- (6) 自分の力は十分出せたか? …… ( )
- (7) 練習は十分できたか? …… ( )
- (8) 集会は計画どおり進んだか? …… ( )

〈心に残ったこと〉

： 〈担任の言葉〉

：

：

：

## ⑤ 生活習慣づくり

子どもたちが大人となり社会生活を営んでいくためには、守らなければならない基本的な生活規範が求められる。

したがって、教師は学級生活の中で、子どもたちが社会生活に必要な資質や態度・能力を習得し、発達させていくように指導・支援していくことが大切である。

「基本的な生活習慣づくりの視点」「基本的な生活習慣の形成」の2点から整理すると次のようことが考えられる。

### ア 基本的な生活習慣づくりの視点

#### 〈 基本的な生活習慣づくりの視点 〉

- 1 学級の一員として、集団生活の規律に適應する生活習慣を形成する。
- 2 発達段階に応じて、基本的な生活習慣形成のための基本を、段階的に身に付けさせる。
- 3 学習活動やその他の諸活動の準備ができる習慣を形成する。
- 4 児童・生徒、周りの人々が快適に過ごせるための、また、自己を高めるための生活習慣を形成する。

### イ 基本的な生活習慣の形成

基本的な生活習慣を児童・生徒に形成するためには、全教職員が、守らせる習慣や習慣形成と対となっている「きまり」に対するとらえ、指導の基本、配慮すべき事項等について、共通理解する必要がある。

基本的な生活習慣の形成のための要点として、次のような内容が考えられる。

### く 基本的な生活習慣の形成の要点 〉

- 1 形成する基本的な生活習慣の内容や形成するための方策について、全教職員が共通理解を図る。
- 2 全教職員の連帯感に支えられた協働の指導となるようにする。
- 3 開かれた学級・学年としての指導体制をとる。
- 4 小さな言動も見落とさずに指導の徹底を図る。
- 5 「きまり」は、学校・学年の教育目標、さらには、学級教育目標を具現化するための一部であることを理解し合う。
- 6 社会背景や子どもたちの感覚、意識等に十分配慮し、指導内容の重点化を図る。
- 7 子どもたちの心理をよく理解し、厳しさの中にも温かさのある指導を行う。
- 8 学級集団の中での子どもたちの「よさ」の発見に努め、「よさ」を認め、さらに伸ばすよう規律の指導を行う。
- 9 道徳や学級活動において、自己評価力を育てる指導を行う。
- 10 自分たちできまりをつくり、自分たちで決まりを守る活動を充実する。

### ウ 指導すべき基本的な生活習慣の内容

#### く 指導すべき基本的な生活習慣の具体的な内容 〉

- 1 生活習慣の面
  - ・ 礼儀作法、言葉づかい、服装、健康・安全
  - ・ 整理整頓、物の活用、時間の活用、家での仕事の手伝い
  - ・ 生活態度、きまり、係り活動、清掃活動、勤労奉仕
- 2 学習習慣の面
  - ・ 学習態度（聞き方・椅子への座り方・発表の仕方）
  - ・ 学習の準備と後始末
  - ・ 家庭での学習時間の活用と確保

## ⑥ 教室の教育環境づくり

教室のもつ機能としては、単に知識を教える場としての教室、子どもたちに働きかけ新たなものを生み出す教育環境としての教室が考えられる。

したがって、子どもたちが教室環境に働きかけ、あるいは教室環境から働きかけられることによって、学力や心身が豊かに成長するよう教室内外を整美し運用していく教師の責務は重大だといえる。

このように、子どもたちの成長を促すように教室の環境を整えたり、子どもたちが働きかけられるような環境にしたりすることを「教室環境づくり」といい、学級経営を進める上での大切なポイントとなっている。

以下、「教室環境の内容」「教室環境づくりのポイント」を整理すると、次のような点が考えられる。

### ア 教室環境の内容

教育環境を子どもに与える教育作用の点から整理すると、物としての環境である物的環境、取り巻く人としての環境である人的環境、子どもたちの意識に影響を与える心理的な環境に分けられる。

物的環境には、施設、備品、教材、教具、資料、机の配置、壁面、黒板、採光、通風、換気、保温、色彩などがあり、子どもが学習しやすい教育環境となるように創意・工夫されることが大切である。

人的環境としては、教室で共に過ごす友達であり、担任を中心とした教職員が考えられる。

ここでは、一人ひとりが生きる教育の場として、なかよく協力し合って学習や生活ができる環境（心理的な環境）づくりが学級担任に求められる。また、教師が子どもたちの前で発する言葉や行動は、子どもたちに大きな影響を与える人的環境といえる。

したがって、教師には、豊かな言語環境や人的環境のモデルとしての、適切な言動が求められる。

## イ 教室環境づくりのポイント

## ＜ 教室環境づくりのポイント ＞

環境の整備者・対象	環境づくりのポイント
A 担任が整える環境 (安全確保・発育促進)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教室内の安全性の確保 <ul style="list-style-type: none"> <li>・危険物、不衛生物の除去、取り扱い方の指導（鉢など）</li> <li>・床の状況の確認（雨天時は滑りやすくなる）</li> <li>・室内での過ごし方の指導（含：廊下の通り方）</li> </ul> </li> <li>○ 発育を妨げる状況の解消 <ul style="list-style-type: none"> <li>・採光、換気、室温、机・椅子の高さ（姿勢と関係）の確認と改善</li> <li>・健康観察による教室環境の整備（風邪の罹患者がいる時は、換気や手洗い・うがいの指導。出停となる疾病は早期発見による治療措置）</li> </ul> </li> </ul> <p>＊ 校舎内・校庭の危険ヶ所は事前に確認し指導</p>
B 担任が整える環境 (掲示の場等の整理)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 掲示の場・内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・正面…静的、学級の機能 〈級訓、校時表、時間割表、係分担、発表の仕方等〉</li> <li>・側面…学習の足跡 〈新出漢字や重要語、英単語、公式、学習流れ等〉</li> <li>・背面…動的、子どもの作品・提案やニュース 〈作品：絵、作文、硬筆・毛筆 提案：係から等〉</li> </ul> </li> </ul>
C 担任が整える環境 (人的環境・言語環境)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 人的環境 <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の言動の整備 〈児童・生徒の呼称：さん、会話：です。ます。〉</li> <li>・児童・生徒の言動の整備：特に学習の中での発言 〈友達同士の呼称：さん、発表：です。ます。〉</li> </ul> </li> <li>＊ どの子へも、一人の人間として温かく接する。</li> <li>○ 言語環境 <ul style="list-style-type: none"> <li>＊ 学習指導要領に言語環境を整え、児童・生徒の言語活動の充実が示されており、指導者が率先してその範を示すことが求められている。人的環境でも触れているので略。</li> </ul> </li> </ul>
D 子どもが創る環境 (情報提供・依頼)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童・生徒の提案・意見の掲示 <ul style="list-style-type: none"> <li>・係りからの提案やお願い、アンケートへの協力依頼等 〈給食係：食器後片始末の協力依頼 広報：記事募集〉</li> <li>・児童・生徒からの情報提供等 〈地域での祭りやスポーツ大会の結果等〉</li> </ul> </li> </ul>

#### (4) 学級経営案の作成と実施

学級を担任したら、学級経営案を作成し学級経営にあたることになる。

この時に作成する学級経営案は、学校の教育目標を学級において具現化するための道筋を示すものとなる。

したがって、まず、学級の実態を的確に把握し、それを踏まえた経営案を作成することになる。

学級経営案は、年度の当初に立てるが、その経営案に沿って教育活動を展開する過程で、随時、その結果を評価し、改善のための修正を加えていくことが大切である。

ここでは、「学級経営案作成の意義」「学級経営案の内容」「学級経営案作成の手順」「学級経営案の例」について整理・紹介する。

##### ① 学級経営案作成の意義

学級経営案を作成することは、それに基づいて1年間、学級経営を行うことになり、次の様な意義が考えられる。

#### ＜ 学級経営案作成の意義 ＞

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 年間を見通した学級経営の方針や重点が明確になる。</li><li>2 学級経営が計画的に展開されることになり、実践が充実する。</li><li>3 実態を明確にしながらの経営となるので、児童・生徒の変容がとらえやすくなる。</li><li>4 学級経営をする上での課題が明らかになり、改善の手がかりが得やすくなる。</li><li>5 学級経営の進捗状況を定期的に確認することができる。</li><li>6 同学年を始め、学校全体からの協力を得やすくなる。</li><li>7 子どもの成長が分かり担任に、学級経営への意欲を高める。</li><li>8 年度末に学級経営の成果・課題が整理されることで、次学年へと継続・発展できる。</li></ol> |
|---|



## ② 学級経営案作成の手順

学級経営案を作成するには、次の様な手順が考えられるが、学級を担任して短期間に児童の実態を分析したり、学校教育目標や基本方針等を確認し学級化したりする努力が求められる。

### ＜ 学級経営案作成の手順 ＞

- 1 学校教育目標、基本方針、指導の重点を確認する。
- 2 学年の教育目標、基本方針、指導の重点を確認する。
- 3 学級の児童・生徒に関する資料（実態調査、アンケート等も含）を収集、整理する。
- 4 学級経営の構想を練り明らかにする。
- 5 学級教育目標を設定する。
- 6 学級経営の方針、指導の重点を設定する。
- 7 学級経営の年間計画を作成する。
  - ・ 月毎、学期毎の指導の重点・育成目標・育成方法等の具体化、実施計画の位置付け、評価の時期と評価方法の明示。

## ③ 級経営案の内容

学級経営案の内容としては、次の様な項目と項目に沿った内容が一つの例として考えられる。

### ＜ 学級経営案の内容 ＞

- 1 学級教育目標……学校・学年目標を踏まえた児童・生徒のめざす姿、学級担任の指導方針
- 2 学級経営の基本方針
- 3 学級の実態
  - ・ 学級歴（学級担任歴、特記すべき事項）
  - ・ 児童・生徒の実態（在籍数、男女別、各種の検査結果、学習指導上の問題点、生徒指導上の問題点、生活上の問題点、健康診断状況、健康上特に配慮を要する児童・生徒、体力テストの結果、交友関係、要保

護児童・生徒、出席状況等)

- ・児童・生徒の生活環境（家族構成、登下校の問題、保護者の要望、地域の環境）

4 学級担任の学級観、児童・生徒観

5 学級経営の計画

- ・学級集団の経営計画（班づくり、係活動、学級会の指導等）
- ・学習指導の計画（各教科に共通する学習指導の方針・重点的事項、各教科・道徳・〈外国語活動〉・総合的な学習の時間・特別活動の指導の重点、配慮を要する児童・生徒の個別の指導計画等）
- ・生徒指導の計画（生徒指導の方針・重点事項、道徳・学級活動・学校行事と関連させた指導計画、保健・安全指導、課外活動、教育相談、給食指導、特に配慮を要する児童・生徒に対する個別の指導等）
- ・環境整備の計画（教室環境づくりの方針、正面・側面・背面・空間の利用と整備、展示・掲示の工夫、学級園栽培の工夫、危険物の除去と取り扱う際の指導等）
- ・進路指導の計画

6 家庭との連携

- ・連携の方法（学級通信、連絡帳、学級懇談会、個人面談、家庭訪問、緊急連絡網作成等）
- ・学級 PTA の運営計画（親子行事、学級懇談会、学習参観、親子給食等）

7 経営記録の計画

- ・日常の観察と記録
- ・反省、評価の記録

8 学級経営の評価

- ・学級経営の計画に関するもの（学級教育目標、児童・生徒の理解等）
- ・学級経営の実践に関するもの（学級集団の経営、学習指導の状況、児童・生徒の育ちの状況、生徒指導の状況、教室環境の整備状況、学級事務の処理状況等）

## ④ 経営案作成上の留意点

## く 経営案作成上の留意点

- 1 学級経営案は、教育目標の具現化を目指すものである。したがって、学校教育目標、学年目標を基盤にて、学級の教育目標を設定する。
- 2 児童・生徒の発達段階を理解するとともに、できるだけ多くの調査、資料等から児童・生徒を多面的に把握する。
- 3 児童・生徒の生活環境を熟知するとともに、保護者が我が子の教育についてどのように考え、学校に何を期待しているかを把握する。
- 4 学級集団における児童・生徒の人間関係や活動状況を的確につかむ。
- 5 児童・生徒や家庭環境等について知り得たことで、教育的な配慮をすべきことや、非公開にすべきこと等は、学級経営案には記載しないようにする。
- 6 変容する学級集団の経過や要因、児童・生徒の成長や「よさ」などが記録されるよう工夫する。
- 7 経営の計画と実施が評価され、反省が加えられるように工夫する。

## ⑤ 学級経営案の例

第 ○ 学 年 ○ 組

学 級 経 営 案

担 任 ○ ○ ○ ○

## 1 学級の実態

- (1) 学級構成
- (2) 児童・生徒の生活環境
- (3) 児童・生徒の実態
- (4) 特に配慮を要する児童・生徒

## 2 教育目標

(1) 学校(学年)の教育目標	(2) 学級教育目標
① 互いに考え合う。	① 協力し合いよりよい考えを創り出す。
② 計画を自ら立て実践する。	② 計画を立て自分のめあてに向かって努力する。

## 3 学級経営の方針

- (1) 互いに協力し合ったり、よりよい考えを出し合ったりしながら問題を解決しようとする意欲や態度を育てる。
- (3) 自分で立てた計画に沿って、最後まで粘り強く努力する根気や態度を育てる。

## 4 学級教育目標の具現化

学級目標	児童・生徒の実態	到達目標	評価			
・自ら考え学び続ける。	・何事に対しても自主的に取り組もうとする意欲や態度が十分に育っていない。 ・友達と協力したり励ましたりする姿に欠ける。	・自分で目標を立て、立てた目標に対して最後まで努力する。 ・努力する友達に対し、励まし協力する。	一学期	二学期	三学期	総合
			前 後	前 後	前 後	

\* 学期毎、前半・後半に評価していく。

\* 学年末には年間の総合評価をする。

## 5 学級経営の努力点

	努 力 点 の 具 体 化	評 価			
学 級 経 営	・学級目標の理解の徹底を図り、協力し合って目標実現に向けて努力するようにする。 ・個々の児童・生徒の実態の把握に努め、指導の充実に努める。	一 学 期	二 学 期	三 学 期	総 合
		前 一 後	前 一 後	前 一 後	
学 習 指 導	・具体的な活動や体験を学習指導に積極的に取り入れ、個々の子どもに基礎的・基本的な内容がしっかり定着するようにする。				
生 徒 指 導	・子ども一人ひとりの願いや悩み等を把握し、個々に即した指導の充実を図る。				
環 境 整 備	・年間を通して、教室内の掲示場所に適した内容を計画的に掲示し、子どもたちの学習意欲・活動意欲の喚起に努める。				

\* 家庭との連携、学級経営の記録等については省略

## (5) 経営案の評価と改善

学級経営の評価は、「組織体としての学級が、その本来の機能をどの程度果たしているのかを、学校・学年・学級の教育目標に基づく一定の基準に照らし、包括的、客観的に判定するものであり、その結果を基に、学級で行う教育活動全体についての総合的・有機的な改善策を立てることを目的として実施される評価」である。

したがって、評価は、それだけで完結するのではなく、学校経営を改善していくためのもので、計画（Plan）→ 実施（Do）→ 評価（Check）→ 改善（Akusion）のマネジメント・サイクルにおける重要な役割を果たしている。

評価は「目標の達成度」「計画と実践の有効性・適正」を確かめ、具体的な改善策を探るために実施する。

そのためには、学級経営案（目標、計画、方策等）が、明確に立てられていないと評価できなくなる。また、計画の中には、具体的な方策とともに、評価のポイントも示されるべきである。

評価の時期は、学年末だけでは、評価の結果をすぐに次の学級経営の改善に生かすことができないので、年間を通して、週毎、月毎、学期毎、また、大きな行事が終わったらその都度実施することが大切である。

しっかり評価し、方策等全体の改善を図るには、すくなくとも2ヶ月に1回は全体の評価を実施すべきである。そうしないと、全体の軌道修正が遅れてしまうことになる。

#### ① 学級経営評価のポイント

学級経営の評価は、学級教育目標に照らして、教育の諸活動の達成状況や、それを進めた運営の状況、人的・物的な条件整備の状況、計画・実施・評価・改善の各段階のあり方等の面から行うことになる。

計画・実施・評価の各段階に沿い、そのポイントについて整理すると、次のような点が考えられる。

#### ア 学級経営の計画の段階に関するもの

学級教育目標の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校・学年の教育目標をよく理解し、これを学級の実態に即して具体化し、学級教育目標を立てているか。</li> <li>・学級担任の教育的な願いが込められ、しかも、具体性・客観性がある目標であるか。</li> <li>・学級の学習指導面・生徒指導面の課題解決に向けた目標となっているか。</li> <li>・保護者や地域にも理解され、協力が得られるものとなっているか。</li> </ul>
児童・生徒の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・生徒の発達段階に沿った傾向（知的、情緒的、身体的特徴等）が理解されているか。</li> <li>・調査等によって、学級全体、及び子ども一人ひとりについての特性（知的、情緒的、身体的特徴等）が理解され、個々に沿った計画となっているか。</li> <li>・地域の自然環境や社会環境が理解され、活用されているか。</li> <li>・子ども一人ひとりの生活環境が理解され、それに沿う計画となっているか。</li> </ul>
学級経営案の作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科別、領域別に作成され、しかも総合的に関連が図られているか。</li> <li>・設定された目標や内容が、発展性、系統性をもっているか。</li> <li>・児童・生徒育成のための具体的な目標や手立てに計画性があるか。</li> <li>・担任外の教科等担当や、学年内の他の教師と共通理解が図られているか。</li> </ul>

## イ 学級経営の具体的実践の段階に関するもの

学級集団の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・望ましい学級集団に成長しているか。</li> <li>・学級目標についての共通理解が図られているか。</li> <li>・連帯感、帰属意識は育っているか。</li> <li>・児童・生徒一人ひとりの特徴、役割が理解され、生かされているか。</li> <li>・教師と子どもたちとの人間関係は良好であるか。</li> <li>・学級経営のねらいや内容が他の教師に理解されており、協力が得られるか。</li> </ul>
教室環境の構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導に必要な基本的設備が整備されているか。（黒板、機器、机、掲示板等）</li> <li>・生活環境に必要な基本的条件が整備されているか。（換気、採光、室温等）</li> <li>・指導に必要な事前の準備はできているか。（指導計画、教材・教具、発問や板書、場の構成等）</li> </ul>

## ウ 学級経営の評価・改善の段階に関するもの

評価は、学級経営がどのように展開されたか、計画や具体的な方策、進め方が適切であったか否かを明らかにするものであり、よりよい学級へと創り上げるためには、実践の結果を分析・整理する評価活動が適切に行われ、成果と課題がきちんと整理把握され、それ以降の経営の改善に生かされることが大切である。

整理すると、次のような点が考えられる。

評価の時期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期的な評価…1年間を振り返っての評価</li> <li>・中期的な評価…学期毎の評価、2ヶ月毎、1ヶ月毎の評価</li> <li>・短期的な評価…週ごと、日々の学習ごとの評価 <ul style="list-style-type: none"> <li>* 基本は指導後、その都度であるが、子どもの変容をとらえるにはある一定の期間が必要である。</li> <li>* 計画全体の見直しは、2ヶ月毎だと子どもの変容もとらえられ進めやすい。</li> </ul> </li> </ul>
評価の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級の教育目標に関する面</li> <li>・児童・生徒の理解の面</li> <li>・学級集団の経営面</li> <li>・学習指導の面</li> <li>・生徒指導の面</li> <li>・教室環境の面</li> <li>・学級事務の面</li> <li>・家庭との連携の面</li> <li>* 以上は項目であり、具体的な内容については240-241pの学級経営の評価例を参照。</li> </ul>

＜ ① 教師自身の自己評価による方法 ＞

- 学級経営案を具体化した、日案・週案・月案・年間計画などに照らし、実践した内容がどの程度達成しているか、すすめ方や方策、実践の時期等が適切だったか等を学級担任自身が評価する。  
評価項目や評価基準等を設けたチェックリストなどで実践の度、週毎、月毎、学期毎と定期的、あるいは、随時評価する。  
評価に客観性をもたせるためには、評価内容によっては学年の他の教師や、学級の教科指導等にかかわっている教師に評価してもらうことが必要である。  
このことは、学級経営に対する理解を生み、協力してもらうことにもなる。

＜ ② 児童・生徒の反応や行動から評価する方法 ＞

- ①を実施するため、担任を始め関係者が日頃の実践の中で積み重ねる評価である。この場合、次の点が大切になる。
  - ・個に即し、温かい眼と心で『よさ』や『のび』『変容』を大切にしながらとらえる。
  - ・表面に現れる反応や行動だけで評価するのではなく、「これまでの経緯やそれらの背景」からとらえる。
  - ・反応や行動とを関連付けてとらえる。
  - ・長く見守りながらとらえる。

＜ ③ テスト結果や調査用紙等から評価する方法 ＞

- テストや調査等などに、子どもたち自身が答えたり、反応したり、感想を述べたりしたことは、学級経営の評価の貴重な資料となる。  
具体的な方法としては、次のようなものが考えられる。
  - ・各種の標準検査やペーパーテストなどで、学習指導や生徒指導の結果についての評価を行う。
  - ・面接法や観察法などで、学習指導や生徒指導の結果についての評価を確かめたり補ったりする。
  - ・学習指導や生徒指導で生じた問題点を整理し、その原因を探り解決を図る。
  - ・グループ日誌や学級日誌、個人ノート、感想文などを利用し、子どもの見方、感じ方、内面を受け止める。

＜ ④ 児童・生徒の自分自身の評価による方法 ＞

- 児童・生徒の自分自身による自己評価を生かし、学級経営の成果を探るのも大切な方法の1つである。この場合、基本的な知識の理解面等の具体的な状況はテストで把握できるので、児童・生徒に自己評価させる内容としては、次のような点が考えられる。
  - ・学級目標に対する自分自身の達成状況
  - ・学習中の発言や集中度
  - ・活動への努力度や協力度
  - ・家庭学習や生活習慣に対する努力度や工夫点、達成できなかった要因等



- ＊自分自身で評価することは、自己を見つめて客観的に自分を評価することだから、子どもたちの自己評価に寄り添い、努力したと判断している内容に対しては認め・励まし、不十分だと判断している内容に対しては、原因等を探り、改善策を明らかにすることが大切になる。
- 自己評価のさせ方としては、次の様な方法が考えられる。
- ・項目毎に評価の尺度を設けて選択させ、選択した理由を書かせる。
- ・〇〇学期を振り返って等、自由記述で反省を書かせる。

#### く ⑤ 保護者・関係者の評価による方法

- 学級経営の良否について保護者や関係者に評価してもらうのも、学級経営の充実には欠かせないことである。

なぜなら、保護者は、家庭で子どもが話す内容や学校へ行く様子、家庭での学習の様子から、学級経営がうまく行っているか否か判断しているからである。

親にはしゃべらなくても、黙々と家庭学習に励むようになれば、学校での学習指導、生徒指導が充実していることが分かる。

担任が変わったり学年が変わったりしたとたん生活が乱れ家庭でも学習しなくなれば、学校での生徒指導や生活指導はどうなっているのか？学習指導や家庭での学習についての指導はどうなっているのか？と、親は心配する。

また、学級で子どもたちを見ていると、つい、弱い立場の子どもや自己表現の少ない子どもの状態を見落としがちになるが、保護者は、いつも我が子の様子に強い関心をもっているので、学級経営の中での我が子の状況をしっかりとらえている。

したがって、親からは個に即した貴重な情報を得ることになる。

学校関係者に学級経営の状況の評価してもらうことは、学級担任による学級経営の閉鎖性を破る上からも、担任の自己満足に終わらないためにも、また、学級経営への理解と協力を得る上からも大切なことである。

保護者・関係者から評価してもらう方法には、次のような例がある。

- ・学校経営の評価や学年経営評価の際に実施する外部評価の一部に、学級経営の評価項目（詳しくは略）を位置付ける方法。
- ・学級目標の達成状況を把握するための調査項目を設定し、集計・分析しやすく、評定尺度を設け選択してもらう方法。
- ・行事等の折りに、参加してもらった保護者・関係者に評価してもらったり、意見・感想をもらう方法。

## ② 学級経営の評価例

(担任の自己評価)(1できていない。2ややできている。3できている。4よくできている。)

評価の項目	評 価 の 観 点	評 価
学級の教育目標	学校・学年の教育目標に沿っているか。	1－2－3－4
	児童・生徒の実態に即しているか。	1－2－3－4
	児童・生徒に理解されているか。	1－2－3－4
	達成されているか。	1－2－3－4
児童・生徒の理解	心身の状況を把握しているか。	1－2－3－4
	交友関係を把握しているか。	1－2－3－4
	学習面の状況を把握しているか。	1－2－3－4
	行動や性格面を把握しているか。	1－2－3－4
	教師と児童・生徒との信頼関係はどうか。	1－2－3－4
	児童・生徒の生活環境を把握しているか。	1－2－3－4
学級集団の経営	学習集団としてまとまっているか。	1－2－3－4
	学習場面で集団としてまとまっているか。	1－2－3－4
	生活場面で集団としてまとまっているか。	1－2－3－4
	小集団の指導は適切にできているか。	1－2－3－4
	リーダーとフォロアーの関係はうまくいっているか。	1－2－3－4
学習指導面の経営	指導計画に基づいて効果的に指導されているか。	1－2－3－4
	自主的・主体的な学習態度の育成はなされているか。	1－2－3－4
	能力や達成度に応じた指導が行われているか。	1－2－3－4
	学習意欲を高め、全員参加の学習が進められているか。	1－2－3－4
	学習形態が適切に取り入れられているか。	1－2－3－4
	指導方法は創意工夫されているか。	1－2－3－4
	配慮を要する子どもへの取り組みは十分であるか。	1－2－3－4
生徒指導面の経営	一人ひとりの能力、個性に応じた指導が展開されているか。	1－2－3－4
	道徳、学級活動等との関連を生かした指導が行われているか。	1－2－3－4
	家庭や地域の実態に即した指導となっているか。	1－2－3－4

生徒指導面の経営	余暇や休暇中の過ごし方について適切に指導しているか。	1 - 2 - 3 - 4
	安全指導や保健指導は適切か。	1 - 2 - 3 - 4
	配慮を要する子どもへの取り組みは十分であるか。	1 - 2 - 3 - 4
教室環境の経営	健康安全への配慮（採光、換気、危険物除去等）は十分であるか。	1 - 2 - 3 - 4
	掲示、展示、黒板等は効果的に活用されているか。	1 - 2 - 3 - 4
	環境整備、美化への配慮は積極的に進められているか。	1 - 2 - 3 - 4
学級事務の経営	学級事務は迅速かつ正確に処理されているか。	1 - 2 - 3 - 4
	書類、帳簿等の保存管理は適切にされているか。	1 - 2 - 3 - 4
	事務の能率化が図られているか。	1 - 2 - 3 - 4
家庭との連絡	学級経営の方針などが保護者に理解され、協力的であるか。	1 - 2 - 3 - 4
	個人懇談や家庭との連絡等を生かし、指導に役立っているか。	1 - 2 - 3 - 4
	連絡帳や学級通信等で情報交換を行っているか。	1 - 2 - 3 - 4

以上、「3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」とかかわりの深い、

「A 『児童・生徒理解の今日的課題』」

「B 『児童・生徒理解とすすめ方』」

「C 『学級経営の意味と重要性』」

の3点から述べてきたが、今日では児童・生徒、学校、地域の実態に即した学校経営が求められている。

したがって、実態に立った学校教育目標、それを実現するために打ち出される学校経営方針を踏えての学級経営が大切である。

また、学級経営にあたっては、学級担任の情熱と創意・工夫に満ちた経営が期待されている。

### 〈引用及び参考文献〉

- 江川玫成 編「生徒指導の理論と方法（改訂版）」学芸図書株式会社 2007 年
- 牧 昌見 著「学校経営の基礎・基本」教育開発研究所 2006 年
- 瀬戸 真 編著「心豊かな子供を育てる児童理解」ぎょうせい 1994 年
- 瀬戸 真 編著「よりよい生き方を育てる学級・学年経営」ぎょうせい 1994 年
- 福岡県教育委員会「若い教師のための教育実践の手引き（21 年度版）」誠文社 2009 年
- 葉養正明 編「教育の制度と経営（四訂版）」学芸図書株式会社 2008 年
- 北 俊夫 著「新しい学校課題と授業の創造」文溪堂 2005 年
- 有村久春 編集「新編 生徒指導読本」教育開発研究所 2007 年
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 総則編」ぎょうせい 2008 年
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 総則編」ぎょうせい 2008 年
- 無藤 隆／嶋野道弘 編著「新教育課程を実現する学校づくり」ぎょうせい 2008 年
- 無藤 隆／嶋野道弘 編著「確かな学力の育成」ぎょうせい 2008 年
- 無藤 隆／嶋野道弘 編著「豊かな心や健やかな体の育成」ぎょうせい 2008 年
- 文部科学省教育課程課／幼児教育課 編集
- 「初等教育資料 5 新教育課程のねらいの実現に向けて－魅力ある教育計画の立案①」  
東洋館出版社 2009 年

## おわりに

この研究は、平成22年度入学生より必修科目として新設された「教職実践演習」について、本学での導入を円滑にするという意図で出発した。研究期間は2年間、研究の態様としては共同研究体制をとるということです。すめている。

今回は、「教職実践演習」をめぐる文部科学省の動向、新科目についての問題や疑問、さらに、教員として求められる資質能力「③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事例」についての内容研究を中心にまとめた。その間、文部科学省や全私教協教員免許事務検討委員会等による資料の提供や指導が継続的に行われ、本研究をすすめるにあたって有効な情報となっている。

7月末の教職実践演習申請の締切を目前にして、文部科学省からは、課程認定委員会で論議作成された「履修カルテ」の様式①②が送付され（平成21

年7月30日）教職実践演習への移行を容易にし、本研究推進のためにも参考資料として活用できるものと考えている。

今後、本研究としては、次号において教員として求められる資質能力「④教科保育内容等の指導力に関する事項」の内容研究を深めるとともに、教員として求められる資質事項①～④の評価基準及び本学独自の「履修カルテ」の作成に取り組む必要があると考えている。また、本学作成のシラバスに基づく試行実験を行い、さらに、よりよいシラバスへ高めていく必要があると考えている。